愛知学院大学心身科学部紀要第6号（29–43）（2010）

臨床心理面接の場のイメージ
――臨床心理士養成大学院生の描画を通して――

田　畑　　治*

本論文はカウンセリング・心理療法などが行われる臨床心理面接の“場”（setting）について，これから教育・訓練を受ける臨床心理士養成コースの大学院学生が一体どのようなイメージを持つか，彼（女）らにそのイメージを描画させ，400字程度で説明をさせた．その結果を各描画と記述内容から，カテゴリーⅠ～Ⅳに分類し，総合的討論を加えた．

キーワード：臨床心理面接の場，イメージ画，大学院臨床心理士キャンディデート

Ⅰ．問題と目的

カウンセリングや心理療法などクライエント（来談者）に心理的介入・援助を行う臨床心理面接の場（setting）ないし場面（situation）の物理的・心理的構造の特徴については，例えば前田（1981）は，その書『心理臨床―精神科臨床と心理臨床家―』の中で，1．外面的構造要因と2．内面的（心理的）構造要因を示している．1．では治療場面の設定，治療者–クライエントの空間配置，時間配置，治療料金，通院治療・入院治療などを挙げ，2．では治療契約，面接のルール，秘密の保持，予約制度，禁欲原則などを挙げている．しかし他方では臨床心理士養成の基本テキストとして刊行されている東山編（2005）は『臨床心理面接学―その歴史と哲学―』で，歴史・哲学，面接の主要な理論的立場（精神力動論，人格成長論，認知・行動論，ならびにシステム論）を論じているが，肝心の臨床心理面接の場や場面の物理的構造（たとえば面接室，イス，机などの“ものがまえ”）に関しては言及していない．また国際的にも著名なProchanska & Norcross（2007：邦訳2010）でも，20余りの主だった心理療法を「多理論統合的分析」（transtheoretical analysis）のモデル・共通項（16項目）を用いて比較分析しているが，同様にかかる面接の場の構造・構成については言及していない．

歴史的には，実際の臨床面接の場は1890年代に精神科医・Freudが無意識を扱う精神分析を開始した診療室がある．これは現在でも『フロイト・ハウス（記念館）』としてオーストリアのウイーン市ベルガッセ19番地の2階に保存され，一般公開されている．その診療室内は，暖色系統のペルシャ織の派手な絨毯が敷かれ，自由連想法で精神分析を行った，かの有名な“カウチ”（寝椅子）が原寸大のカラー写真パネルで残されているし，壁面には「スフィンクスとエディプス」の絵画も残されている．

しかし他方では，非医師である臨床心理学者・Rogers（1942）が世界で初めてカウンセリング面接場面の“秘密のヴェール”を取り払い，H. Bryan（仮名）の20歳後半・男子青年の初回から8回目までの全面接場面の逐語記録を公開した際の物理構造的な場は，想像してみるしかできない．当時の面接場面で録音をすることは，大がかりな“ものものしい装置”で操作をし，今日のように小さいICレコーダーとは異なっていた．当時の面接は1枚の録音ディスクに数分間しか記録できず，それを取り換えるだけでも忙しく，まるで作業所のようであったと言える（畠瀬，1987）．

その後，心理療法を記録した場面の情景がみられるShostrom（1965）の『グロリアと3人のセラピスト』はわが国でも公開記録映像・教材でよく知られている．またAPA（1989）が製作した教育用ビデオ教材・「心理学シリーズ」第22巻『心理療法』で視聴覚的にいくつかの代表的な立場の面接場面の実際を映像化し

＊愛知学院大学心身科学部心理学科
（連絡先）〒470–0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12　E-mail: otabata@dpc.agu.ac.jp

たものがあり，その物理的・心理的な場の諸条件を考える参考になる．

またわが国で制作されたものは，佐治（1992）による『Ｔさんとの治療的面接』があり，その実際をVTRで公開している．その面接場面は専門の和洋書類が部屋の壁面に配架され，観葉常緑植物の鉢が置かれている広い部屋の中央に茶色のテーブルクロスが敷かれた直径約70センチの小さい丸テーブルがあり，面接机の上にはガラス製の灰皿と水が入ったガラスコップが面接者とクライエント用に置かれている．そこでは面接者・佐治氏とクライエント・Ｔさん（31歳・男性）の両者がほぼ対面式に同じサイズのイスに座り，面接をしている．筆者が1989年の在外研究員時代にUCLA・NPI研究所で精神科医・Yamamoto教授の通訳を兼ねて陪席面接に同席した際の面接場面の構造もほぼ同様に専門書・専門誌などが背後に配架され，医師と患者は双方ともに同じ規格のイスに腰かけ，そして陪席者も少し離れてイスに腰かけて臨んでいた．

ところで，河合（1986）は心理療法における“時間・料金・空間”を論じ，時間経過の中での「世俗的時間（D）」と「聖なる時間（B）」の２種類があることを図解し，カーニヴァル等の「聖なる時間」について述べている．また心理療法の場は“聖なる時間”とし，B（聖なる時間）の前・後でのＡとＣのこころの動きを連想させ，示唆深い．また，かつて伊藤・田畑（1995；1996）は人びとが日常生活（ordinary life）を過ごす“日常性”に対し，カウンセリングや心理療法の場は，非日常生活（exstra-ordinary life）であり，“非日常性”に貫かれる世界であることを論じた．すなわち心理療法家（セラピスト）は，クライエントとの臨床心理面接場面で気持ちや態度を自覚的に切り替えることが重要であることを論述した．

それでは，高度専門職業人であるこころの専門家である臨床心理士を目指す大学院生に行う臨床心理面接の教育訓練で，外面的（物理的）・内面的（心理的）な構造や機能を一体どのように伝授し，また臨床心理面接場面をどのように認識・把握させ，かつどのように体得させるのかは不可欠の重要課題である．本稿ではそのような臨床心理面接での時・空間の場を図示した後に，受講生各自が持つイメージを描画させ，そのイメージ画の実際例をいくつかに分類し，臨床心理面接の場のあり様を総合的に考察することを目的とした．

Ⅱ．方　法

1．実施時期：平成21年４月28日：第３限目
2．実施場所：心身科学部14号館・講義室（14412室・スクール形式）
3．参加者：大学院心理学専攻・臨床心理士養成コース，「臨床心理面接特論」（MC1必修科目）の受講生Ｎ＝25．今回は提出されたすべてを採用した．
4．手続き：講義で図１（田畑，2001）を大型スクリーンで提示し，その概要を説明し，その後イメージの描画と説明文（約400字程度）を付すよう教示した．具体的には講義中に一枚の文字入りの図１（「心理療法の展開の図」）を提示し，臨床心理面接場面は，①“非日常性”を持つ場面であること，②クライエントに影響を与える“聖なる場である”旨などをひととおり解説した．

レポート課題として，講義後（時間外）にそのイメージを描画させ，次回の連休明けの講義（５月17日）の開始時にその描画結果を絵の説明文とともに提出するよう求めた．なお描画の用紙や書式は自由とした．

Ⅲ．結果と小考察

次回に提出された各自のイメージ図は，一人１枚であるが，二名は２枚を提出した者もあった．描き方は，①鉛筆（白黒）で濃淡を含む線画のみになっているもの，②色彩が付けられているもの，の２種類になっていたが，ここではそれには拘泥しないことにした．むしろ，この分類で重視したことは，心理臨床で重要な視点である“描画者自身をして説明させ，語らしめること”に基づきカテゴリーⅠ～Ⅳに分類したことである．

その結果，Ⅰ．面接場面そのものの特徴を描画したもの，Ⅱ．面接場面を前・後，中・後の２場面のみを強調・対比して描画したもの，Ⅲ．面接場面で前・中・後という３場面に分けて描画したもの，Ⅳ．面接場面で全経過を時間経過の中での成長・変容過程を描いたもの，に分類することにした．

以下は描画者の“説明文”に沿って分類したものである．

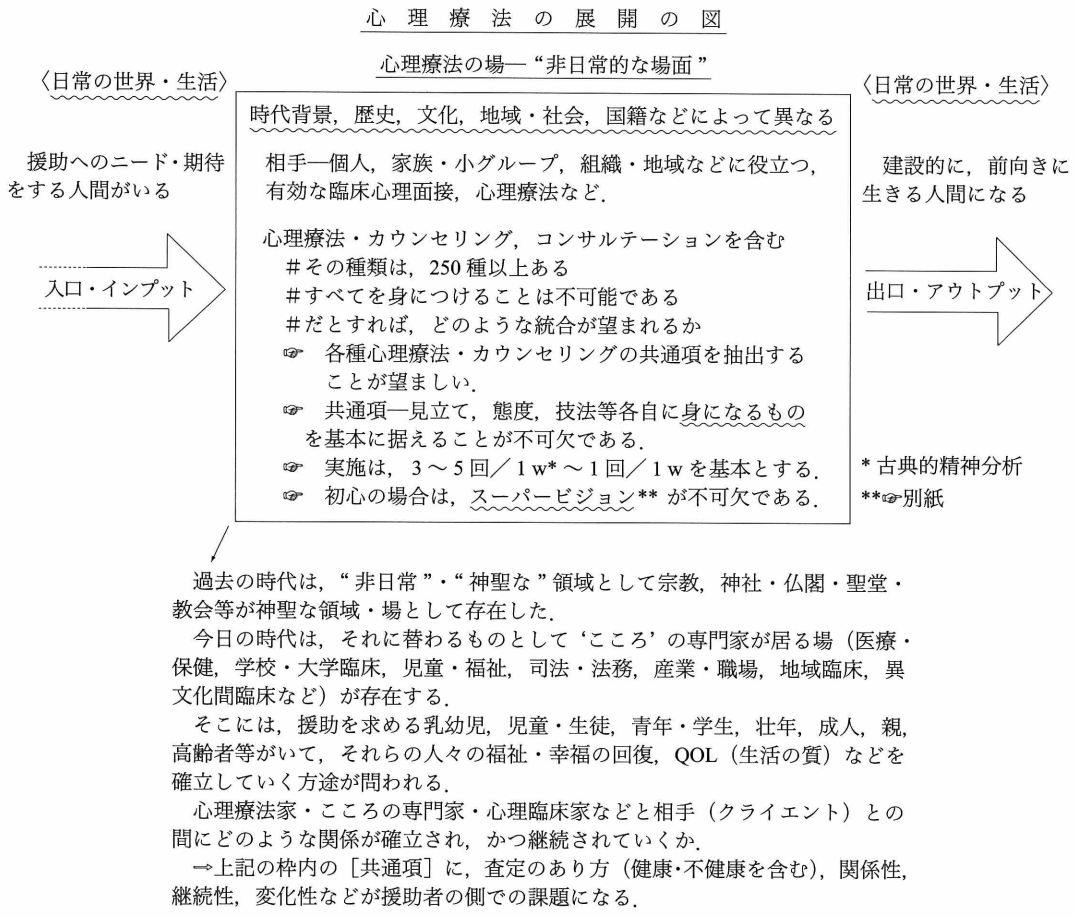

図1　刺激図（田畑，2001）

カテゴリーⅠ：面接場面そのものの特徴についてのイメージ描画

1）聖なる場としての教会・神社などが描かれているもの

これは，全描画のうち15枚（13名）で一番多く，A～Mまである．

A・女性（図2）・カラー：「セイなる場所」という題で描いたこの絵は，特に場所を指定して表しているわけではない．私の考えるセイなる場所は「心の中」にあるからである．もし，どんな綺麗な場所・場面に出会ったとしても，心に余裕や落ち着きがなければ，目の周りに見える世界はセイなる場所に見えないであろう．カウンセリングにおいて，クライエントが自らの悩みと向き合い解放された時，その「セイなる場所」が心にできるのであると考える．心には，安らぎが現れ，現実へと飛び立つクライエントの心（精神力）のイメージがある．この心における「セイなる場所」の「セイ」は様々な「セイ」であると考える．例えば「聖：けがれなく尊いこと」，「誠：まこと；まごころのこと」「清：心身の力，魂のこと」である．このことから，「聖母マリア」，「白い鳩」「十字架」「教会」の絵を描いた．「聖母マリア」は心のセイを表し，「白い鳩」は，これから飛び立つクライエント自身を表す．そして「十字架と教会」は心の帰す場所，自分の心にある象徴である．（KY）

B・男性（図3）・赤黒：午後1時ごろの教会をイメージした．〈一文略〉午後の雲ひとつない青空の元に白亜の教会，芝生等，自分にとっては心の解放と魂のニュートラルなイメージを感じさせるものであった．誰もがこの空間では平等である，と感じさせ，教会に向かって歩く人物はそのニュートラルな自分を求めて，歩いているのだ．あらゆる障害をたちどころに撤去することは不可能に近い．しかしいったん照りさす太陽と教会の粛々とした雰囲気の中で気持ちを中立的にさせ，認知のゆがみや感情の偏りなどを改めることから全て始まる，そのようなイメージで描いた．〈以

下略〉(KH)

C・女性（図４）・白黒：カウンセリングルームのイメージを森の奥にある厳かな神社に表現した．気軽に来談できるようにするならば，もっと温かく開かれた環境の方が良いかもしれない．しかし，カウンセリングを通して，クライアントに心理的な変容をあたえるには，ある程度クライアントにも動機づけが高くなくてはならないと思う．ここで扱う心の問題はクライアントにとって封をしたもの．セラピストはその封を開けてクライアントの福祉［＝増進］につなげようとするのだから，カウンセリングルームでは互いにとって修行のように辛い思いをするのではないだろうか．その辛い作業を外部から守り（守秘義務など），温かく支える活動（心理療法，援助，等）をすることを保障する守られた場がカウンセリングルームだと思う．祈願する参拝者を温かく迎えるように，自ら困難を感じ，改善を強く願う人にこそ役に立つ場であってほしい．そのためにも，セラピストは勉強して，いつでも対応できるよう修行しておかなくてはならないと思う．(YDF)

２）森の中と静寂な湖の場面が描かれているもの

D・女性（図5–1：図5–2）・カラー，白黒：神聖なカウンセリング場面のイメージとして，森の中の静かな湖を浮かべた．来談者が湖のほとりに佇み，現実でありながら非日常的な空間で自分自身の姿を見つめ，カウンセラーはそれに寄り添うイメージである．来談者はそこで，日常生活の上で負った傷を癒したり，様々なことを試しに行ったり，あるいは内省を深める．鬱蒼と生い茂る木々に囲まれたその場所は，見る人によっては薄暗く，寂しいものであるかもしれないが，大自然の中で安息と癒しを得ることができ，美しく神々しいものに見えることもあろう．そして，その湖の場所を一度知れば，外界に出て行ってもいつでも戻ってくることができるのである．しかし，自然に中に存在する湖のほとりは季節や気候の変化という人間の力の及ばないものによって影響を受ける．実際のカウンセリング場面もまた，来談者とカウンセラーが共同して対処することによって，来談者は新たな力を手に入れるのではないであろうか．〈以下省略〉(IM)

３）浜辺から深海に臨む心のあり方

E・女性（図６）・カラー：想像した相談室のイメージとして海を描いた．この海はクライアント自身の心の海である．今までは砂浜の貝等で気を紛らわし海と向き合うことをしないでも済んだ．しかしある問題を抱え，自分の心の海に入っていかなければならない状態となった．海というのは浅いところは海の底を上から見下ろして確認できるが，深いところまで行くと上から見下ろしただけでは海底の様子はわからない．むしろ海底に入っていった人でないと分からない．人の心にもそういう部分があるのではないだろうか．海底は暗くて視覚はまったく意味をなさないが生き物が泳いでいる．その生き物たちは視覚に頼らずに生きている．人の心の深層部分では外からの視覚では捉えることの出来ない何かを得てクライアントはまた砂浜に戻ってくる，という事を示した絵である．カウンセラーはクライアントの注意が貝や砂浜に向かないように方向つけをする立場だと私は考えている．(OT)

４）守られる，包まれる，暖色系・月の光のイメージが描かれているもの

F・男性（図７）・カラー：カウンセラーはどのような人たちなのだろうか？　或いはカウンセリングに何を期待しているのだろうか？　ということを考えた．イメージ画を描くにあたり，私たちが出会う多くの人たちは，そのようなカウンセリングの対象者としては，悩みや不安を抱えた人を容易に想像する．悩みや不安を抱えた人たちが，不安を軽減するために来談され，臨床心理士は彼らの悩みに寄り添い，支援する姿を．けれど私たちが対象とするのは，悩みや不安を訴えている人だけではないと思う．私の周りには屈託もない笑顔を私に見せてくれる児童施設の子どもたちがいる．その笑顔だけ見ていると何も悩みや不安がないように感じる．しかし子ども達は，親から虐待を受けたり，家庭で一緒に生活できないといった何らかの理由により，施設に措置されている．自ら不安や悩みを訴えることができない子ども達の心にも寄り添っていくことが必要である．「手当て」という言葉があるが，出会った人を大切に包み込み，その中で互いに理解できる場であればとのイメージから描いた．(TKN)

G・女性（図８）・カラー：カウンセリング室のイメージとして，教会やお寺などのイメージとして非日常的でかつ厳粛なイメ一所を持つ．〈中略〉しかしカウンセリング室の聖なる場所は，そのイメージに加えて暖かく，守られているというイメージがあり，カウンセリング室の周りには種々な色の円を描いた．この円は，カウンセリング室が聖なる場所でありながら，暖かみをより持っている場所だと表す意味と Cl. と Co. の様々な気持ちの様子を表し，それが合わさることで一色よりもよりよい色を表すように，２人の信頼関係によって種々な問題と向き合う様子を表した．〈以下略〉(YZ)

H：女性（図9）・白黒：社会で生活していく以上，どうしても仮面は必要だと思う．制限や抑制もある．全てから自由になることはできないと思う．でもカウンセリングを受けることによって気持ちが楽になったり，折り合いをつけることができるようになるのではないかと思い，描いた．(OB①)

I・女性（図10）・カラー：相談室というのは，物理的にはある一つの相談室であっても，いろいろなクライエントとセラピストが使う．中に入ったその二人（時には二人以上）の組み合わせによって相談室はさまざまな表情を見せる．このような考えから，具体的な人物や物は描かず，抽象的な絵で相談室のイメージ図を描いた．真ん中の卵形のような丸いものは，相談室の空気，雰囲気である．クライエントが暖かい雰囲気で迎えられるイメージから，色は暖色系のものを使った．また下の暗い色については，カウンセリングは即座にクライエントが成長したり，環境が改善されたりして，展開が明るくなって行ったりするものではなく，不安や転移，戸惑いなどのマイナスの感情も出てくることが予想されるので，明るいだけでない，という意味である．さらに卵形の丸いものから，上に向かって黄色い光のような線が出ているのは，最終的には明るい兆し，展望が見えてくる，という意味で描いた．自分自身が，クライエントと一緒に，どんな相談室を作っていけるか，そのことを念頭に置いて勉強したい．(UD)

5）光り輝く場で“俗人が俗人に会う，平等な場”として描かれているもの

J・男性（図11；図12）・カラー2枚：自分にとってカウンセリングルームは「聖なる場所」とはならないため，2枚になった．1枚目：先ず，聖なる場所はイメージ図である．光は太陽ではなく「光り輝くもの」である．人に羽が生えているが妖精ではなく，あくまで人間である．2枚目：次にカウンセリングルームは男の人と女の人が手を繋いでいる．これは全ての人が平等であることを意味している．カウンセリングルームは「俗人が俗人に会う場所」であるため，聖なる場所とはならず，またそれ故に平等である．(IT, ①, ②)

6）逞しく生きる力（＝リーサリティ）を啓培するイメージが描かれているもの

K・女性（図13）・カラー：①：図の左側の黒と紫の渦のぐるぐるとした様子⇒心のもやもや．混沌として悩みや問題の整理もつかずに暗澹とした精神状態，②右下の水色のしずく⇒涙．どうしたらいいのか分からず，ただ悲しい，さみしい，なんだか辛い，といった様子．③黄緑色の歪んだ筒状の，女性が出てきているもの⇒面接室．守秘義務なので中は見えない．行ったり来たりできるようになっていてたまに過去を覗いたりも出来る．④右側のキラキラ（桃色）⇒愛情．愛情が形として見えるように．愛や優しさなどの暖かいものも認識できるようになった．⑤女の子が持っている武器⇒：厳しい現実社会を生き抜くために必要なアイテム．自分が一番使いやすいもの．作ったのかもしれない．この武器を磨き，使い慣れることで戦って生き抜く．⑥右下にいる化け物・火柱や突き上げる洪水⇒現実社会におけるいろいろな障害や敵，脅威．これも，混沌としたものではなく，はっきりと捉えられるようになった．でも武器もあるし，愛も認識できるから大丈夫．(TY)

7）クライエントの心理的世界＝宇宙が描かれているもの

L・男性（図14）・カラー：聖なる場所をイメージした際，教会や寺が思い浮かんだが，あまりしっくりとこない感じが自分に中にあったために，それは止めた．そこで「聖なる場所に自分がいたら，どんな感覚になるのだろうか」ということを想像していたら，内的世界とか内的宇宙といった言葉が連想されたため，宇宙を描きたくなった．日常生活において，さまざまな悩みや苦しみといったものに束縛されている人は，心理的に地球の重力に強く引っ張られているような感じであり，相談室という非日常的な空間は，そういった束縛から解放され，心に浮遊感を感じることができる場所のイメージである．自分の中の内的宇宙を，自由に飛び回って広く探索したいという好奇心もあれば，あまり遠くに行き過ぎると，糸の切れた凧のようになってしまって，心理的な迷子になるのではないかという心配もある．(TG)

8）壊れたものの回復の場

M・女性（図15）・カラー：一度壊れたものは二度と元通りになることはない．元にもどすことはできないが，違う形を作ることはできると思い，草花を描いた．真ん中にいる羽根のある女の子は，クライエントがカウンセリングルームで体験するであろう神秘的な体験をイメージして描いた．手に花を持っているが，これは歓迎を表した．後ろの月は疲れている時に，太陽の光は辛いと思った．月の優しい光に照らされて気持ちも落ちつけていく，また見守られるというものもイメージした．(OB①)

カテゴリーIの小考察：このカテゴリーIの大半は“面接室という場そのもの”がイメージ画になってい

るが，細かく見ると描画者個々の人となりや個人的な経験が良く表現されているといえよう．サブ・カテゴリー自体も，1）から8）まで多様になっている．“場”も，教会・神社以外に静寂な森と湖，海辺と深海（への「踏み込み」），掌中のハート，太陽光が差す部屋，内的宇宙，種々の色彩がある部屋・面接机・生け花，壊れた仮面着用の少年・少女像，俗人同士の世界などである．これらは特定の治療理論に染まらない，各自の純粋で独自のイメージが表明されていると考えられる．特にサブ・カテゴリー6）の逞しく生きる力【＝リーサリティ】と命名した描画者は心理療法が生易しいものではないことを予知しているかのように思われた．

カテゴリーII：面接場面を前・後，中–後の２場面を対比・強調で描いたもの

これは全部で3枚（3名）があり，N～Pまでである．

N・女性（図16）・カラー：心理療法の場のイメージとして，カウンセリングルームをイメージして，カウンセリングがどのような場であるかをイメージした時に，クライエントが守られる場ということをイメージした．「守られる」イメージを考えたとき，お母さんの中（胎内）をイメージしたのでお腹を上部に大きく描いた．お母さんのお腹は温かく，栄養をたくさん貰って，お腹の中の赤ちゃんはすくすく育つように，カウンセリングはクライエントにとって，自らの心を耕す温かい場で，セラピストは問題解決を援助するという力（栄養）をクライエントに与える場があると思う．お腹の中には，面接で座るいす，プレイルームになるおもちゃを描いた．

下部にはカウンセリングを終了したクライエントをイメージし，カウンセリングという非日常から現実世界という日常に戻る場面を，ドアとその一歩を踏み出す足で表現した．クライエントが現実世界に戻るとき，その先にある喜び，楽しみ，苦しみ，困難さはクライエントがそれぞれ感じたり，思ったりすることであり，クライエントの考え次第で，未来は未知数，無限であると思ったため，ドアの周りは何も描かなかった．心理療法の場はクライエントの問題解決を援助し，自分の人生を再び生きるための作業の場で，今までの人生を受容しながら，再び生きるための人生のリスタートともいえるのかなと思った．何も描かなかったことに対して，このレポートを機に再び考えてみると，前述したリスタートに繋がるように感じた．（SN）

O・女性（図17）・カラー：黒と灰色で書（描）かれた部分は，不安と混乱に支配されたクライエントを表している．さらにとげとげに書（描）かれているのは，自分の心を防衛している姿や周囲からの攻撃によって傷つけられている姿を表現している．そのようなクライエントを助けようとしている“聖なる場所”として，暖色を使用して描かれているのが相談室である．相談室にはカウンセラーがいるのは当然であるが，その他の人々がクライエントに力を貸しているイメージがあった．そこで数々の円は，クライエントの家族，友人，環境など癒す力を持つものを表現している．その円の“聖なる場所”に入ったクライエントは，川の石が丸くなるように，心から出たトゲを削られ，同じように暖色で円になっていくと考えた．（KY）

P・女性（図18）・白黒：何があるという訳ではないということを表現しようと思った．何か，とてもすごいものが起こって，そんな魔法みたいなことが心理学（心理療法）ではないのだと思う．ごくごく普通の出来ごとのなかでおこるものではないか，そう思うからこそ，絵の真ん中が空白になっている．そして見たとおりに，景色はある意味，変わっていない．“ずっと今まで，下を見て，そして頭の上には黒い雲があつく垂れこめ，土は乾いて縁（緑）が無い，そう思っていた．だけれども，その実は単に自分が木の影にいて広場の中に立っていた．それだけだった”というような，自分がそう信じていたからおこっている出来ごと．そんなイメージを込めた．セラピーは，自分がどんな自分かに出会う場所なのではないだろうか．（HJ）

カテゴリーIIの小考察：これらは面接場面を中–後，ないし前–後の2場面のみについて対比的に描画しているものである．図16は面接中を母胎内になぞらえ，守る，暖める，育むなど“母性的な場”をイメージしている．図17は面接前の場面を黒・灰色で刺々しく象徴化し，面接後では暖色で輪が連鎖しており，丸くなり，象徴化されているものである．図18は面接前–後の変化を樹木や天候と人物になぞらえている．入口である面接前では樹木・草花は枯渇しているし，天候も曇天であるし，また人物も頭をうな垂れて陰鬱で生気が無い．それに対して面接中は〈空白・ブランク・vacuum〉である．出口の面接後は樹木・草花は生気や活気があり，天候も晴朗であり，人物も背筋が伸び，顔も腕も上がっているところが印象的である．

カテゴリーIII：面接場面を前–中–後という３場面で構成しているもの

これは全部で8枚（8名）が該当し，Q～Xまでで

ある．

Q・男性（図19）・白黒：まず相談室に来る前のCl.（クライエント）のイメージとして，落ち込んでいて，暗い雰囲気を出しているような人が浮かんできたのでそれを書（描）いた．そして暗い雰囲気とは，反対のイメージとして，自らが光り輝くような雰囲気を持つ人ということで書（描）いた．聖なる場所というのは，最後まで自分のイメージにぴったりと当てはまるものが浮かばなかったので，ありきたりかと思いながら，宗教的なイメージや懺悔のイメージから教会を聖なる場所として書（描）いた．（TN）

R・女性（図20）・カラー：まず，始めは，暗く落ち込んでいるクライエントの様子である．周りには何もなく，ただ暗闇が広がっている．この時の服の色はあまり明るくない色にした．次の「聖なる」イメージは，私の中ではキリスト教の教会のイメージになった．話を聞いてもらうこの空間のイメージは，キラキラしており，どんなことでも受け入れてもらえるような雰囲気である．この時の服の色は明るすぎず暗すぎず，なるべく中性色を選んだ．カウンセラーのシスターは何色にも染まらない黒い色をまとっている．最後には面接場面から離れて，自分の道を光溢れる未来へ向かっていくイメージだが，決して一人ではなく，天使が常に傍らにいて，いつでも支えになるという雰囲気をイメージした．このときの服は明るい色を選んだ．（SG）

なお図19と図20は画題や描画スタイルがよく似通よっていることが伺える．

S・女性（図21）・カラー：カウンセリングの絵のイメージとして，先ずカウンセリングを受ける前のイメージを都会の夜の風景で描いた．都会（街）には，沢山の人が生活を営んでいる．そこには，さまざまな暮らしが存在するであろう．そして，家々に灯る夜のネオンと同じくらい，目には見えなくともそれぞれの人がそれぞれ悩みを抱えているのではないかと想像を巡らせて描いた．私のカウンセリングのイメージは，人と人とが手と手を繋ぎ合うイメージである．カウンセリングの場面では，心と心がふれあい情緒的な交流が働くというイメージがあり，その意味合いでこの絵を描いた．最後に，カウンセリングの後の絵のイメージは，早朝に山々から昇る朝日のイメージである．これはカウンセリングを経て，自らの持つ自我の強さを取り戻し，建設的・前向きにこれからも自身の人生を歩んでゆこうとする姿を象徴的に描いた．（NIM）

T・女性（図22）・カラー：「ture colors」〈受ける前〉色々な色が混ざり合っている．ぐちゃぐちゃとしていて，何色なのかよく分からない．色々な色は自分が抱えている問題であったり，悩みであったり，親や他人の価値観だったりする．〈面接中〉円形の部分，受ける前と受けた後で，個人が全く別人になってしまうわけではないので，円のまわりは全てつながっている：非日常の特別な空間．シャボン玉のような弾力を持ち，形は変わる時もあるが，割れることはない．外界からの音は何も聞こえない．クリアな空間．一度クリアになることで自分の本当の色について考える．自分と向き合う空間．十牛図から連想．〈受けた後〉面接を重なるごとに，本当の自分の色をだんだんと感じることが出来るようになる．色が下の方に沈んで落ちついていくようなイメージ．（OB）

U・女性（図23）・カラー：〈面接前〉カウンセリングを受ける以前の状態では，イライラしたような厳しい表情を浮かべている．またスーツ姿で髪を束ねて前髪もヘアピンでとめていることなど，全体としてかしこまった印象が特徴的である．これは，面接室を訪れる以前の，不安が多く，カウンセリングに対してもどこか疑いを持ち，信頼を置いていけない状態を表現した．〈面接中〉面接室の中でのイメージ．真ん中の絵は正方形できっちり区切られている．これは面接室が守られた空間であり，外部からは決して覗かれることがない，という様子を表現した．出入り口にはドアを設けている．この中でクライエントは，語りを通して不安やストレスから開放される．また大自然に中でリフレッシュするというイメージがあるが，これは私が考える「聖なる場所」のイメージである．〈面接後〉面接室を出たクライエントは，すっかりリフレッシュされており，そこからまた，自分らしく前向きに人生を送ってゆくことになる．洋服の色や髪型は，クライエントの「自分らしさ」を表現した．（HA）

V・女性（図24）・カラー：〈面接前〉この絵の左側にいる人は相談室に入る前のクライエントである．クライエントは様々な悩みを持って来談する．その例えとして上から「背負った荷物が重くなって歩けなくなった人」，「いい人の仮面をかぶって歩き難く（生き難く）なった人」，また途中には人生におけるい障碍という意味の石を描いた．〈面接中〉そして黄色の光に包まれた真ん中が相談室である．私は自分自身が悩んだとき，「花が咲き鳥が鳴き，何をか悩まん」という言葉を思い出す．自然の中の一部として人間をあるがままに考える，そういう宇宙全体の捉え方が根本にある相談室を考えた．また以前，寝ているお釈迦様を

見たことがあり，ふと思い浮かんだ．また相談室の象徴的な理想像だと思う．そして池があるのはクライエントの心を鏡に映すためである．また鳥は自由であるが，厳しい現実を逞しく生きる象徴である．〈面接後〉相談室を出たクライエントは，あるがままの自分を受け入れ，自分の人生を自分の足で一歩一歩歩いていけるようになるのが相談室の役割と考え，右の人物を描いた．人生は山あり，谷ありだけれども，人生という階段を一歩一歩登りながら，顔を上げ「自分の人生のボスは自分だ」というように，その人なりの道を歩いていけるのが理想である．」（以下省略）（NOM）

W・男性（図25）・白黒：クライエントのイメージは，千手観音のように手がたくさんついているイメージ．手は何かを掴むためにあるもの．それがたくさんあるということは，様々な欲を掴もうとしている．体はひとつしかないのに，自分の限界以上を望もうとしている．千手観音の場合は，そのすべての苦しみを取り去るための，救済する目的として手がたくさんついているが，その意味とは違う．

そして，そんなクライエントとカウンセリングという場において，セラピストがどのような働きをするかというと，その多すぎる手を刀で切り捨てる作業を手伝う．クライエント自身が自分で手を切る場合もあるだろうし，セラピストが手を加えることもあるかもしれない．クライエントの体に見合った手だけ残し，煩悩，欲を取り去った体になれた時点で，カウンセリングは終了する．カウンセリングを終えたクライエントは，本来の姿を取り戻す．【注：上段の描画①】もう一つのカウンセリング場面イメージは，深海の底に沈んでいくというイメージ．深い無意識の底へ沈んでいき，自分の心の鼓動しか聞こえない，何も見えないといった状況で自分を見つめ直し，余分な手が取れた時点で，深海から上がってくるというもの．【注：下段の描画②】（KB，①，②）

X・男性（図26）・白黒：この描画者は説明文がないが，明らかにこのカテゴリーである．

２つの描画がある．その一（①）は〈面接前〉に二人の人が路上で握手し“契約”を交わしている．〈面接中〉は両者がイスにかけて面接している．またその中で治療目標として高い山【富士山】や他の山が描かれている．〈前–中–後〉が×印二線で交錯している．もう一（②）は〈前–中–後〉が線画で描かれている．線画では〈面接前〉は，心が“重し”で重圧になり顔の表情は“しかめ面”で曇っている．〈面接中〉ではカウンセラーに抱えられた腕の中で“筋肉トレーニング”や“腕立て伏せ”のトレーニングを行っている．〈面接後〉は心の重圧が取れ，顔の表情も明るくなっている．（KG，①，②）

カテゴリーⅢの小考察：これは文字通り，面接前–中–後という時間区分での３場面が描かれているものである．共通しているのは〈面接前〉では，“陰”，“うな垂れ”，“歩行不能・前進不可”，“夜”，“外面での身構え”，“余計な手がある”，“（こころの）重圧・重荷”であり，〈面接中〉での“教会風の場面での告白や聴き入り”，“ハートでの握手”，“自由な開放”，“花鳥が舞い，お釈迦様の前で居る”，“余分な手を削ぎ落とすために真剣で立ち会う場面”，“バーベルなどでの筋肉鍛錬”となり，そして〈面接後〉の“生きる勇気・希望”，“晴天・光”，“希望への前進”，“払暁（体験）”，“身軽・余分な手の無い気分”，“仮面が取れ，ありのままの自己”，“自分の手・足のみ”などが描かれている．

カテゴリーⅣ：面接場面の前–中–後の３つが描かれ，かつ成長や変容の過程を描いているもの．

これは全部で２枚（２名）であり，ＹとＺである．

Y・男性（図27）・白黒：援助を必要としている人を植物にたとえ，日常とは異なった空間で水を与えたり，肥料を与えて世話をすることで障害されていた本来ある力，備わっている力を促進できるように援助していく．本来ある力は，根強い根を張り，風や雨に負けないような頑丈かつ柔軟な茎を伸ばし，世界に一つだけの特別な花を咲かせることにイメージを重ねている．しかし，水を「与える」，肥料を「与える」という空間は，日常的，自然的な在り方からは非日常的であり，日常，現実に戻っていくことが大切である．そのような心理療法（現在，私がイメージしているものだが）を描写した．（TG）

Z・男性（図28）・カラー：クライエント（Cl.）が治療者（Th.）との面接を通して元気になっていくことの様子を描いた．Cl. の沈んだ気分を冬にたとえ，回復した気分を春に喩えた．冬の中でも葉を落としている姿から，芽を出し，そして花を開いていく姿を描いた．冬の寒さが厳しいほど，春にはきれいな花を咲かすという言葉があるが，Cl. の場合，ひとりでは咲かすことができないと思う．面接場面では，Th. が Cl. の気分の四季を変えていくのかと思う．そして，冬から春になった Cl. は現実社会に戻っていくのである．（絵の）地球は円環的であり，循環的である．そのため，また辛い季節になったら，もう一度 Th. のいる面接場面に戻っていくのである．（YDM）

カテゴリーⅣの小考察：これら2枚の図は男性2名のみの描画である．図27は，成長する植物に喩え，都会の雑踏の中（日常性）に発芽してから，別の鉢（非日常性）に移されて栄養分として水分，肥料など外側から与える仕事（＝心理療法）を描いており，最後の段階では樹木が大きく成長し，開花している．場面は全部で5場面で構成されている．図28は人物の心理的状態を樹木になぞらえて描いている．初期の首を前に垂れた人物と夜と冬・三日月などが始まりであり，元気・希望のある人物と昼と春・太陽光とを終結としている．場面は全部で8場面ある．それらの諸変化の基盤に大きな地球があることである．これらの展開から，筆者（田畑，2010）は従来から日本語で言われてきている「冬来たりなば，春遠からじ」，「急いてはことをし損じる」，「災い転じて福となす」などを連想する．心の問題の解消や改善は1回でけりがつくことはまず無いのである．長い時間経過を経て，成長・変容するものであることを予期させている．そのためには，臨床心理面接では「関係性」，「継続性」，そして「変化性」を忘れてはならないと考えられるのである．

Ⅳ．総合的考察

1．臨床心理面接の場のイメージ描画の個性的な多様性について

臨床心理面接の導入教育の一環として，受講生が描いたイメージ図は，カテゴリーⅠからカテゴリーⅣまでの広がりを見せた．これは各自がこれまで身につけてきた個人背景（生育歴，学校教育，学習経験，既婚・未婚，社会人経験の有無など）を反映しているとも考えられる．受講生は，概して全員が熱心に取り組んでくれたと考える．

ある院生（女性・図24）は，提出した説明文にいみじくも「しかし，これは，あくまでも理想で，現実はもっとどろどろしているのはいわずもがなである．でも今回，こうして描いてみて，自分のなかで（面接場面を）表現することで，今までの自分のイメージをまとめることができ，また，今後の自分にとっての一つの軸となると思った．これから，この絵に足したり消したりという作業の中で常に自分と向き合える気がする．今回の素晴らしい機会を頂き，有り難く感じた」と感想を述べている．これは筆者としても全く同感であり，大切な記述であると考える．イメージはその都度ないしはその後の教育訓練やスーパーヴィジョンによって修正され，改変されて行くべきものである．

2．臨床心理基礎実習や臨床心理実習を通してのイメージの変化について

高度専門職業人の養成としての臨床心理面接の教育訓練は，大学院1年次に開講されている．受講生は臨床心理面接特論も含めた，その他の“座学”や臨床心理基礎実習や臨床心理実習という“実習・体験”も含めて，修学期間のわずか2年間に多岐にわたる教育訓練を受けなければならない．

臨床心理面接の学習や実践の要点は，①相手と会う場（setting）・場（situation），②相手（client）：乳幼児・児童，思春期・青年期，成人などの年齢種別や人格発達水準や精神病理水準などによる区分，③面接活動（activity）の形態：個人・カップル（夫婦）・家族・小集団・大集団・コミュニティ・異文化間など①から③までの組み合わせで対応する必要がある．

今回の臨床心理面接でのイメージ描画は，①では「面接室（カウンセリング・ルーム）」を，②では言語を媒介にしての青年期や成人のカウンセリング・心理療法を，③では一対一の個人面接を，それぞれ前提とした臨床心理面接であったという限定をしたい．なぜなら，相手にしても，乳幼児・児童を相手とした臨床心理面接では，言葉や非言語を通しての関わりよりも，遊び（play）や表現を媒介にしての遊戯面接が多くなる．さらに今日学校教育でも重視されてきているADHD，発達障害（碍）などの行動特徴を示す子どもへの面接では，療育活動が求められるという現実がある．

しかし，たとえどのような相手であろうと「心理療法の“舞台”では，主役はクライエントであり，「個」から「関係」や「間主観性」を通して心に関わるという「関係の相手主体の場」というものを相手と共に築いていく」（堀越・Hedges，2010）という視点は，ずっと一貫して持ちつづけることが不可欠であろう．

現在，学内での「臨床心理基礎実習」や「臨床心理実習」も並行して行なわれているし，また学外での臨床実習も3領域（医療・保健領域，学校教育領域，また福祉領域など）も行われている．今回は，スタート時点でのイメージ描画であるが，今後これらの諸実習体験とも撚り合わせた結果のイメージ描画を知る必要がある．受講生には今後，臨床心理実習体験もかなりハードな作業になる．さらにまた実際に来談者と臨床心理面接を開始するとスーパーヴィジョン（＝supervision；監督実習）も受けなければならない．その結果として2年後に，今回行った臨床心理面接のイメージがどのように変化するかを追跡的に行うことも

興味があるところである.

V. 要 約

本論文は，高度専門職業人・心の専門家である臨床心理士を目指す大学院学生に開講される臨床心理面接特論の受講生（N=25）に対し，新学期の導入部で『心理療法の展開の図』を提示して説明し，それについての各自のイメージ図を描かせ，その説明文（400字程度）を求めた．その結果を，記述者の説明に基づき，カテゴリーⅠ～Ⅳまでに分類した．カテゴリーⅠは臨床心理面接の場そのもの，カテゴリーⅡは臨床心理面接の場の前–中，または前–後の2場面を強調した描画，カテゴリーⅢは臨床心理面接の前–中–後の3場面の変化についての描画，そしてカテゴリーⅣは臨床心理面接の時間経過の中での変容過程について描画されたものであった．その結果と小考察を基にして，1．臨床心理面接の場のイメージ描画の個性的な多様性，2．臨床心理基礎実習や臨床心理実習を通してのイメージの変化について，総合的な考察をした．

付 記

本論文は，平成21年度大学院心身科学研究科心理学専攻・臨床心理士養成コース受講生の皆さんの描画と説明文の提供によるところが大きい．事前に了解を得ていましたが，再度記して謝辞を述べます．また制作された描画を論文に取り込む編集作業に，心理臨床センター・カウンセラーの原賀学さん，並びに心理学科・実験助手の杉山佳菜子さんのご支援をいただきましたことも感謝いたします．

引用文献

APA 1989（邦訳：肥田野直監修 1999 心理療法（心理学への招待，第22巻）). 丸善 KK.

APA Psychotherapy Videotape Series II 2000 （邦訳：S. マーフィ重松・岩壁茂監修，岩壁茂訳 2002 JIP）Handbook of Psychological Change. Psychothrapy: Theory, Research and Practice PSYC-630-001-Fall.

畠瀬稔 1987 カール・ロジャーズの人と業績（人間関係研究会「Encounter 出会いの広場」No. 5）カール・ロジャーズ追悼号.

東山紘久編 2005 臨床心理面接学 —その歴史と哲学—.（大塚義孝・岡堂哲雄・東山紘久・下山晴彦監修 臨床心理学全書3）誠信書房.

堀越勝・Hedges, L. E. 2010 WORLD MAP：「関係」を通して心にかかわる —ローレンス・ヘッジス博士インタビュー—. 心理臨床の広場（日本心理臨床学会編）4. Vol. 2, No. 2, pp. 47–48.

伊藤義美・田畑治 1995 心理療法における日常性と非日常性. 心理臨床—名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要，第10巻，25–36.

伊藤義美・田畑治 1996 サイコセラピストにおける日常性と非日常性. 心理臨床—名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要，第11巻，5–16.

河合隼雄 1986 心理療法における場所・時間・料金について. 心理療法論考. 新曜社. pp. 96–111.

前田重治 1981 心理臨床 —精神科臨床と心理臨床家—. 星和書店. pp. 144–146.

Prochanska, J. O. & Norcross, J. C. 2007 Systems of Psychotherapy—A Transtheoretical Analysis. Brooks/Cole, A Cengage Learning Company.（ジェームズ, O. プロチャンスカ・ジョン, C. ノルクロス著，津田彰・山崎久美子監訳 2010 心理療法の諸システム —多理論統合的分析—（第6版）. 金子書房.）

Rogers, C. R. 1942 Counseling and Psychotherapy—Newer Concepts in Practice. Houghton Mifflin Co.（邦訳：C. R. ロジャーズ著，末武康弘・保坂亨・諸富祥彦共訳 2003 カウンセリングと心理療法 —実践のための新しい概念—. 岩崎学術出版社. pp. 235–401.）

佐治守夫 1992 治療的面接の実際 — T さんとの面接（第1巻・面接編）. 日本・精神技術研究所.

Shostrom, E. (Ed.) 1965 Three Approaches to Psychotherapies.（邦訳：E. ショストロム編, 佐治守夫・他訳編 1980 グロリアと3人のセラピスト. 日本・精神技術研究所.）

田畑治 2001 心理療法の展開の図（mimeograph.）

田畑治 2010 シンポジウム：心理学の現在と未来 —臨床心理学：PCA の立場から—. 東海心理学会第59回大会. 名古屋大学大学院環境学研究科.

最終版平成22年7月27日

カテゴリーⅠ①(図２～９)

図 2

図 3

図 4

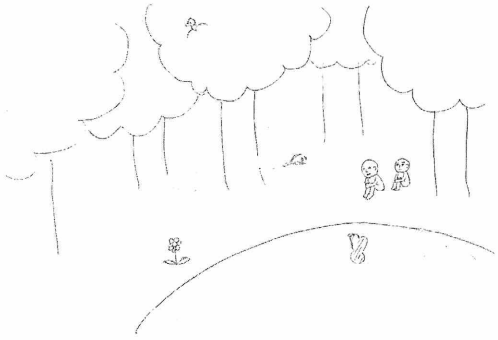

図5−1

図5−2

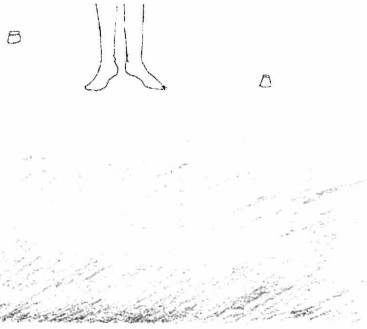

図 6

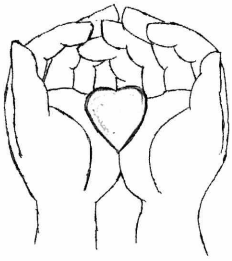

図 7

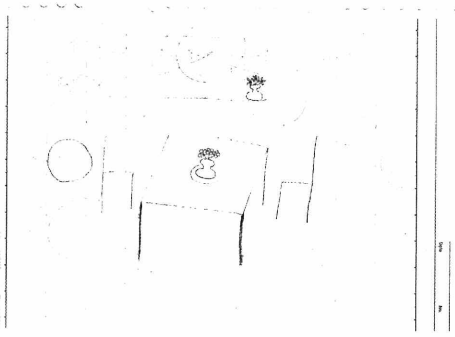

図 8

図 9

カテゴリーⅠ②（図10〜15）

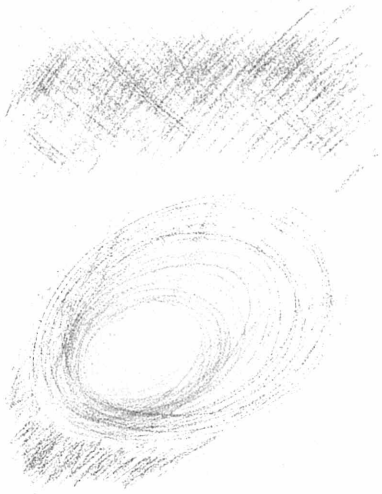

図10

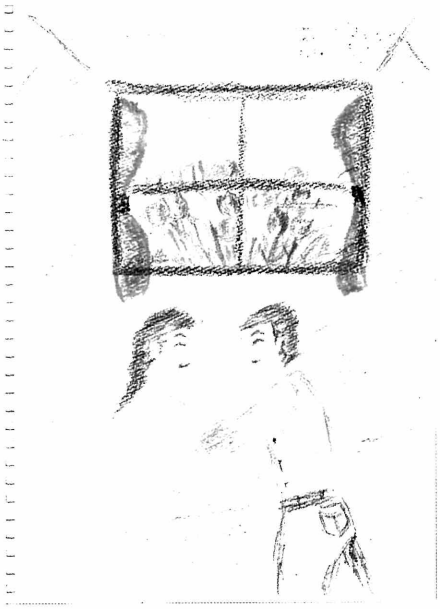

図11

図12

図13

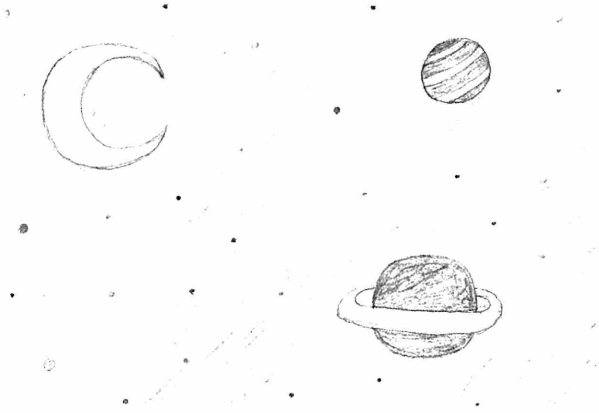

図14

図15

カテゴリーII（図16〜18）

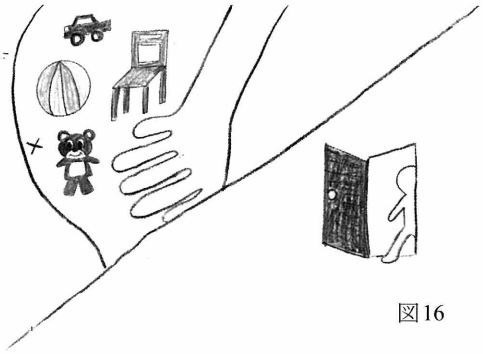

図16

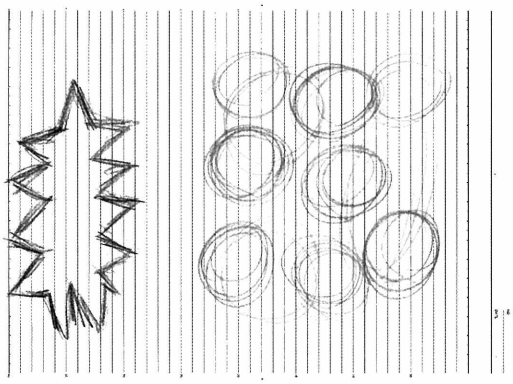

図17

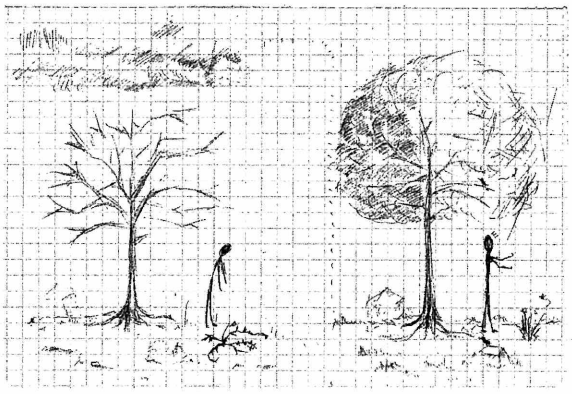

図18

カテゴリーIII①（図19〜22）

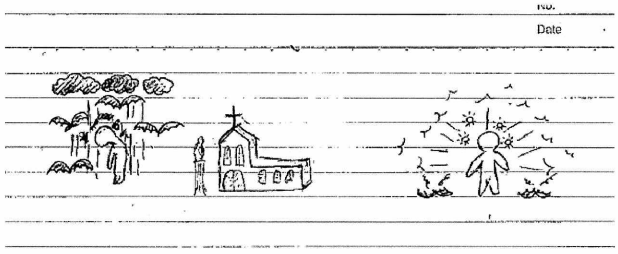

図19

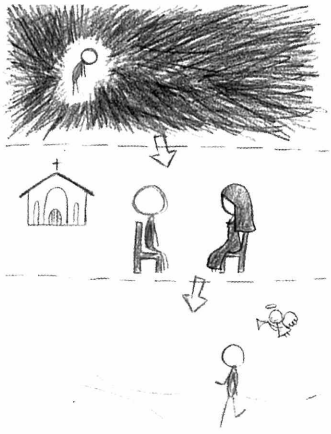

図20

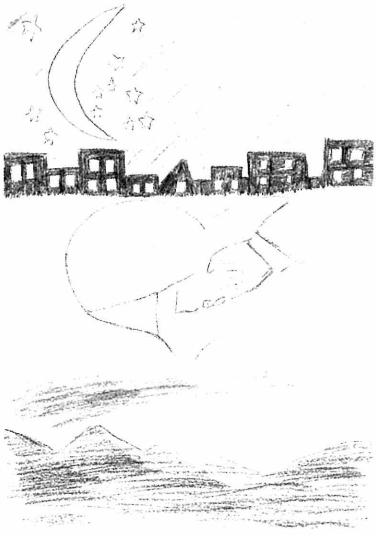

図21

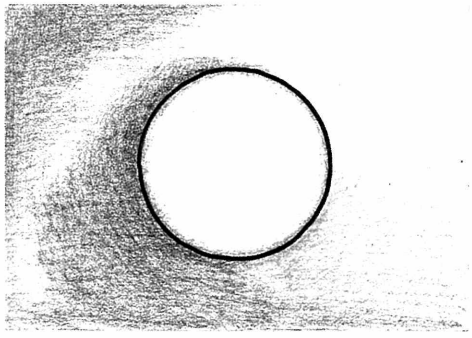

図22

カテゴリーⅢ②（図23～26）

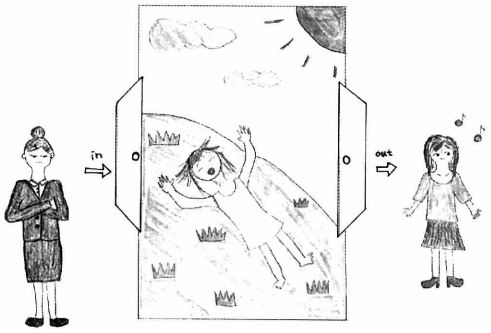

図23

図24

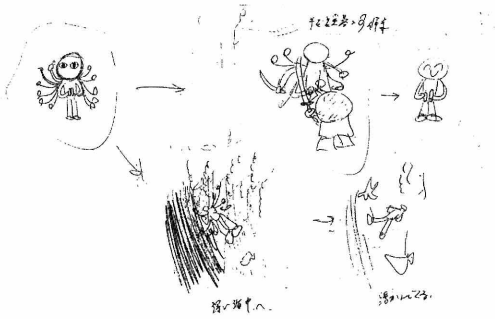

図25

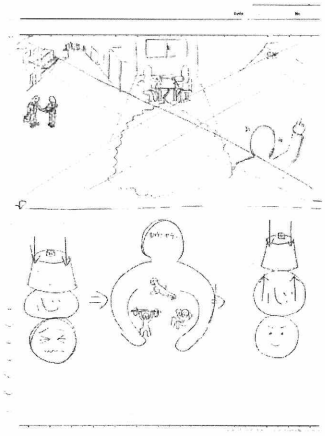

図26

カテゴリーⅣ（図27～28）

図27

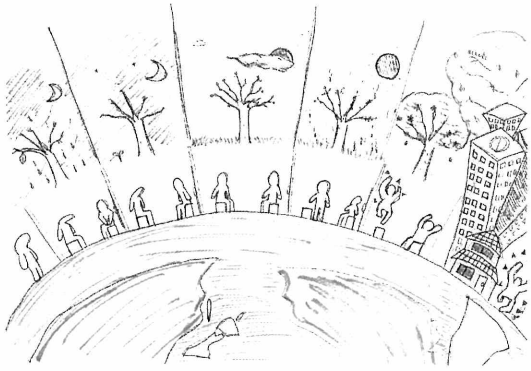

図28

Bulletin of The Faculty of Psychological & Physical Science, No. 6, 29–43, 2010

Images of a Setting of Clinical-Psychological Interviews: Drawing by Graduate Students

Osamu TABATA

The purpose of this study was to draw images of a setting of clinical-psychological interview, having been shown a stimulus figure about "development of psychotherapy" by the author. Participants were 25 graduate students who were majoring in clinical psychology.

The results were categorized into four patterns: Category I was the clinical interview setting itself, Category II was the before-during , or/and before-after interview, Category III was the before-during-after interview, and Category IV was the changing processes of the clinical interview.

Those results presented the following factors: one was the unique characteristic of multiple images of the students, and the second was possible image changes following the clinical practices and experiences thereafter.

Keywords: setting of clinical-psychological interview, drawing images of the interview, candidate of certified clinical psychologist, graduate student